

■ ■ フランス語挿入小噺～幸せなピクニック

Junko Higasa(2013.8.4)

ある日、**ヴワ**(voix)とした**声**で電話があった。「あれっ、ジャン？どうしたの、気だるそうに」「うん、暑くて少し参っている」気温 30 度に届かないサラッとした夏のパリにも近年の異常気象が忍び寄る。「でもまあ、**エテ**(été)して夏は暑いものだから」「それでサ、どこか涼しいところへ行かないか？」「**ウ**(où)どこに？」「都市の**ヴィル**(ville)が見えない所さ」「そうね、自然があるところへね。お弁当つくろうか？」「いいね。丁度ルームメイトが**室**を**サル**(salle)ときに、美味しい**ワイン**を**ヴァン**(vin)と置いていってくれたから、それを持って行くよ」

そういうわけで出かけたものの、年代物のジャンの**車**から**オート**(auto)が聞える。「何だか、変わった音がするけれど大丈夫？」案の定エンストした。辺りに車のほとんど見えない静かな道でよかった。ジャンは**カポ**(capot)と**ボンネット**を開けて 10 分ばかり点検していたが、幸い大したことなく無事走り続けることが出来た。

しばらく走っていくと、視界に**ブワ**(bois)と**森**が広がったので、私たちはそこへ行くことに決めた。かなり広い森の中だが**プワン**(point)と**点**のように何かが見える。近づいてよく見ると**ベンチ**が**バン**(banc)と据えられている。全く自然そのままではなく公園として管理されているらしい。結構遠くまで来たかと思ったが、割合都市の近くだったりして。何しろジャンは方向音痴だから。帰りは大丈夫かしら？

しかし余計なことを考えている暇はない。私は**腕**に**ブラ**(bras)さげているお弁当が重いので、躊躇なくベンチの一つを選んで腰を下ろした。ジャンとしばらく見つめ合う。「あれ？きょうは**赤いルーージュ**(rouge)をつけて来たんだね」「そうよ、今頃気付いたの？」木々によって新鮮な**空気**を**エル**(air)と同時に、心が**翼**を**エル**(aile)ごとく幸せな**状態**を**エタ**(état)ときに、目の前を突然**シャ**(chat)と**猫**が横切った。ジャンは**指**を**ドウワ**(doigt)と宙に広げて「やれやれ」という表情をした。猫は公園内に造られた小さな池の**橋**を**ポン**(pont)と飛び越えて見えなくなった。ハイ、最初からやり直し。「きょうは赤いルーージュをつけて来たんだね」それはさっき聞いた。その先へ進め。

と、そこへ**フウル**(foule)ごとく**群衆**が現れた。「マジ？」この人たちどこから来たの？一体今日は何の日かしら？何が始まるのかしら？それはこの地域の祭りに参加する人々だった。祭りが始まるまで公園内で涼みながら打合せする気らしい。もうっ！家の中で準備してよ。それでも幸い皆木陰の深い処へ消えて行った。「きょうは赤いルーージュを…」それはもういい。

何だか気持ちが疲れたし、お腹も空いてきたので私たちはお弁当を食べることにした。彼の持ってきたワインでも飲んで気分一新しましょう。

「ところで何を作って来てくれたのかな？」彼が興味深そうに**袋**(sac)の中を**サク**と覗く。フランスのピクニック弁当の定番といえば「ごちゃ混ぜ」という意味もある**サラダ**(salade サラド)と表面がカリッとしたフランスパンで作る**サンドウイッチ**(sandwich サンドウイシュ)だ。**酢**(vinaigre ヴィネグル)加減の絶妙な**ピクルス**(pickles)も添えて。酸味は夏バテに効きそうだ。定番ながら私はちょっと工夫を凝らした。

ジャンは美味しそうに頬張ってくれた。「旨い！**モ**(mot)**言葉**も出ないくらい旨いよ」モ～褒めすぎ！でもきょうのはちょっと自信がある新ヴァージョン。「急に頭から**イデ**(idée)たる**アイデア**は、かくも彼の心を捉えたか」とつい劇中のヒロイン気分になる。食べ物の好みは**それぞれのシャク**(chaque)度によって違うこともあるから、感覚が合ってた。彼の持ってきてくれたワインもとてもおいしかったので、私たちは幸せな気分で一気に**ビュ**(but)と**目的**に達した。何の？勿論フランス人定番の。